

試験時間

90分

注意事項

- 1 解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。
- 2 問題用紙、下書用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

医療の進歩は、不治の病を抱えている多くの人たちにとって大きな希望だ。医療の進歩を信じて、これからも研究がつけられていくことになるだろう。その過程においていかなる大きな前進があるかは、あらかじめ知ることができないのだから。しかし、人類が病氣から解放され、「病氣のない世界」で幸せな一生を送る時代が来るかのような幻想を抱くことはやめた方がよいだろう。そのような夢の可能性を信じて生きていきたいと思う心は理解できるが、医学・医療の有効性に対して根拠のない無制限の信頼をしないことが肝要だ。医療の力は強力だが、限界がある。

医療の力は「治療まで」であって、治療を目指す医療提供モデル(すなわち「治療モデル」)だけでは、「治療後」の長い時間に対してまったく不十分なことではある。患者の大部分が高齢者となってきた今日では、治療の成功は必ずしも健康の回復を意味しない。WHO(世界保健機関)は、健康を「病氣でないとか、弱っていない」ということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること(日本WHO協会訳)と定義づけている。しかし、高齢者の場合には、肉体的には障害が残り、精神的に打ちのめされ、社会から排除された人生を送らざるをえなくなる可能性もある。

これまでの医学は、実に治療後の患者の生活には無関心であった。実際のところ、医学と医療の世界だけで手いっぱい、患者の生活にまで配慮をめぐらせることは非常にむずかしい。医療の治療能力に対する信頼や期待が大きいために、現在の医療提供体制の「治療後」の生活へのサポート体制の欠如は、日本の医療システムにとって大きな弱点となっている。

日本人の平均寿命が急速に延長して、高齢者の「治療後」の生活のサポート、すなわち介護が家庭内の問題では済まなくなってきたとき、日本には高度成長の過程で大量に生み出された病床があり、国民皆保険に加えて無料化された老人医療があった。その結果、老人の介護は医療とひびくため病院が担当するようになった。無料化によって、老人が病院に収容され、家族は安心することができた。

しかし、看取りに至るヒトの自然の過程を、家族の日常生活から分離し、家庭とは離れた病院で起きる特殊現象とすることで、死は日常生活を送る人々には見えないものとなっていった。無料化で老人の医療が手厚くなったという面はあるものの、支払い方式が出来高払いであったために、検査漬け・薬漬けの問題や「社会的入院」の問題が発生した。また、老人の徘徊や転倒を防止するという理由でベッドに拘束するため、寝たきり老人が全国的に発生し、経管栄養や点滴のチューブがスパゲッティ症候群と呼ばれる状態を生み出していった。

実際、医療の現場にいた医師にしても看護師にしても、当時、老人をどのように介護するのが適切かということを考えるより前に、もっている医療・看護技術をどのように応用するか、ということを考えていた。さらに、その状況からいかに有効に病院経営に利することを考え出すかに集中した病院もあった。老人の介護は社会が担うものだという意識はまだなく、介護は本来家族がするものであり、昔は家族がお年寄りを手厚く世話したものだ、という思い込みがあった。しかし、岡本祐三が『高齢者医療と福祉』で指摘しているように、家族が高齢者の最期を看取るあいだの短期間の介護はあったが、障害を抱えた高齢者を何年も世話するような介護はほとんどなかった。現在の高齢者の介護はまったく新しい事態であり、「昔は家族が温かく世話をしてきた」という思い込みは、「かい」「の」「かい」であった。

(出典 桐野高明著「医療の選択」岩波新書)

問一 文章に見合ったタイトルを三十字以内でつけなさい。

問二 傍線部に「医療の力は強力だが、限界がある。」とあるが、筆者の考える「医療の限界」とはどういったものか、二百字以内で述べなさい。

問三 あなたの考える、超高齢社会を迎えた我が国におけるこれからの介護の在り方について、八百字以内で論述しなさい。